

朝鮮通信使による日本語韻文史料

一発句、和歌などの短冊色紙をめぐる一

管 宗次（武庫川女子大学）

1、はじめに

朝鮮通信使の往来のなかでも、同じアジアで中国文化を基礎教養として鍛えられた教養人である日本人と朝鮮人が出会い、交流するうちに互いの共通なものや異なるものとの顕著な違いに気付く、そのような近世期の異文化交流史の一齣に、果たした通信使随行員の余業がある。

和歌と俳諧という日本語文学にも見事な作を残して、接応する日本人たちを驚かせた訳官たちのことに、これまであまりまとめられ論じられたものがないのも、とても残念なことである。

朝鮮通信使の通行路、また所々での文人交流によって、アジアの共通言語の漢文を用いての応酬詩はこれまでも数多く発見されている。

また、海外との交流のほとんどなかった近世期において、文化レベルの高い李朝の科挙試で鍛えられた文官達の詩書画の実際に触れることができたのは、日本の文人たちには人生における最大級の喜びでもあった。また、国外の学者と交流する機会のほとんどなかったこの時代に、科挙試に鍛えられた李朝官僚の人々と直接に詩文のやりとりをするというのは千載一遇の機会であった。漢詩文の両国のレベルの高さは目を見張るものがあり、応酬詩を詩集に採録したものには多数で枚挙に暇ない。一方、日本人には、詩情を託する韻文に漢詩があるほかに、大和言葉による韻文の和歌と俳諧がある。

2、日本語による韻文

新井白石は朝鮮通信使について述べるのには欠くべからざる人物であるが、通信使の役官の能力について触れて、「訳官は巧みであるというが、和歌もつくれない」という手厳しい評もあるが、訳官のなかには和歌や俳諧を楽しむものもあった。寛延元年1748・英祖24年度の随員の朴徳源は和歌・俳諧に自在で、

恭平や具足の餅のかびる迄

朝鮮豊窩

はるをしる竹のまがきの朝露は
千代もかはらぬいろやそふらん
朝鮮豊窩

と発句（俳譜）に和歌に作品を残している。また、その筆跡も達者な仮名書で、当時の日本人を驚かしたことであろう。

朴徳源のようなみごとな談林風の句を詠んだ人物は少ないかもしれないが、他にも、日本の韻文文学に手を染めた人物が何人かいたようである。発句や和歌も漢詩と同様に指導者の許で修練を積まねばならないものであるから、何百句や何百首を編んだような句集や歌稿もおそらく存在したことかと思われるし、朴徳源日本の俳書や歌書にも馴染んでいたと考えることのほうが自然であろう。

また、それらの披露の場も漢詩とは自ずと違ったはずであろうし、その料紙や俳風、句風についても触れてみたいと思う。

それらが広い意味で、日本語習得の枠の内のもとの外のもとのがあったことも考えてみたい。新井白石が知らなかっただけのことで、日本語も書き言葉としゃべり言葉（口頭語）が大いに異なることは、熟知していたようである。これは、既に言われていることのようにであるが、燕京使に随行の中国語訳官たちは、口語（白話）に通曉のため流行の通俗語に常に関心を持ち、風俗に敏感であったという。

日本への通信使随行の訳官も日本語の韻文である和歌俳諧に、興味を示したのは当然かもしれないし、日本文化への理解を深めることにもなったが、外交と訳官としての仕事の枠外の範囲ではなかったかと思える和歌俳諧、これらをさらに見ていきたい。

3、訳官朴徳源

朴徳源は寛延元年・英祖 24 年（1748）度の随行員としてやって来た折は、日本における韻文の俳諧の俳風の中興期に入る前夜であり、天明期（1781～1789）のいわゆる天明調や寛政期の俳諧中興期に入らんとするころであった。

筆者家蔵の発句短冊には、見事な仮名書きで朴徳源は次のような発句を書いている。

泰平や具足の餅のかびる迄
朝鮮豊窩（印）

この句は同じ語を用いたもので秀句がある。上島鬼貫の句に「具足餅」の語の句があり、

我宿の春は来にけり具足餅

この句は、『鬼貫句選』の上・春の部に載せられており、「具足餅」「具足の餅」がめでたい春の季語として使われた例としてあげることができる。「具足餅」は武家故実で、正月になると甲冑に餅を供えることをいう。「泰平」の「具足餅」、武家では慶事であり、めでたい言葉であり、天下泰平を言い、將軍家の徳川家重襲職への賀詞となっており、通信使の随行員訳官の来聘した折りの作とは思えぬ出来である。「也哉」の切れ字を用いての武家故実の発句、いかにも談林俳諧らしい。のびやかな天下泰平の御世のめでたさに、天明調にはないおおらかな詠みぶりに加えて、料紙に引き付けられる。

料紙が、日本人のいうところの朝鮮紙を短冊の大きさに切って用いたものであり、訳官から贈られたひとが日本の武士で句を嗜む人でもあったろうか。応接にあたった武士であったと考えるほうが句意や趣向を思うと自然であろう。「壯堅紙」と称したりしているが、通信使は贈答品目にも朝鮮紙を用いているが、漢詩の詩作や揮毫に異邦の紙に染筆されたものを日本人は非常に珍重した。また、和紙の贈答を通信使の随行員は喜んだのは当然の成り行きであろう。

餅が徹るほどに長久にと、天下泰平の御世を言祝ぐ賀詞。切れ字に「や」を用い、「泰平」を言祝ぐ通信使訳官の折りにも似た、穏やかな豊かな心持に染筆した句短冊は古美術店より購入したものであるが、発句短冊の張り混ぜ屏風に日本人のものに交じってあったものという。他にあった句短冊がどんなものであったのかは、今はわからないが、訳官の発句短冊と知らずにいて、さほどの違和感はなかったという、古美術商の言葉は興味深い。

天理大学附属天理図書館蔵の短冊帖のなかにも日本人の句短冊に交じって、訳官の短冊がある。文化8年・純祖11年(1811)の折の訳官、卞文圭(号は梅軒)の句短冊で、

初声はいそげほととぎす

朝鮮国梅軒書

というもので、この句も句作は文化年間ならば既に天明調や蕪村の句風の盛んな時期であるが、まして蕪風というよりは談林風というべきもので、訳官(通事)に共通したものがあろうである。あるいは、武家に好まれた談林風に訳官たちが傾いたのか、談林派の句集や俳書が彼らのテキストとしてあったのかもしれない。なにか共通するものがあるのは偶然とは思えない。

また、時代的には遅れて、実際の流行時勢とは若干の差が生じるということかも知れなかもしれない。

朴徳源は、和歌も詠んでいる。次の一点は、大阪市立博物館展観「朝鮮通信使—善隣友好の使節団—」出品(出品番号56)のもので竹の画賛、和歌で扇面に染筆したものである。

まがきの竹の
朝露は
千代もかはらぬ
いろやそふらん
朝鮮 豊窩

ここで、韻文作品である和歌と俳諧には、署名が違うのが本来のきまりである。和歌はハレの場に相応しい文芸であり、武家故実・公家有職故実ともに儀式には必ず詠み出だす場面があった。その折には「名乗り名」をあげる。卑近な例をあげると、幕末期に大政奉還に尽力した坂本龍馬は、和歌短冊を多く残しているが署名は「直柔」であり、作法通りの運筆作法である。坂本龍馬の贋物短冊は時折、古美術市場に姿を現すがみな出来が悪く、「龍馬」署名である。

また、俳諧は本来、発句短冊などの署名は俳号でするものと決められている。また俳号は普通宗匠から許されることも多く、和歌の染筆に俳号に用いた名前を署名することは有り得ないことである。

朴徳源が漢詩に用いる「豊窩」の雅号を日本の韻文である和歌や俳諧の染筆に用いているのは、それぞれの宗匠の指導のもとに作られたのではなくて、訳官の通詞の仕事の合間になされた、まったくの余技として書物の知識から学んで詠んでいたのであろう。

朴徳源の豊窩の号は、洒落ている。「窩」という号は日本では少ない。朝鮮では多かったようで通信使の人にも、

洪啓禧（澹窩）

玄徳淵（疏窩）

李彦佑（梅窩）

などが用いられているが、日本人には異国情緒あふれたものとして珍しがられたことであろう。「豊窩」の「豊」は「しゃべれはするが、耳は聞こえない」ということであろう。外国語の苦手な者が「もっとゆっくりしゃべってください」とか、幾度も幾度も相手に聞き返す有様を、「豊」と自嘲を込めてコミカルに号したのでであろう。日本語における訳官として和歌や発句にこれほどの作が自由自在な者が、「豊」を自称するおかしみには当時の日本人も舌を巻いたであろう。

4、短冊という料紙

和歌を浄書するのに、日本で短冊という料紙の形式が登場したのは鎌倉時代末から南北朝期説が最の有力だが、中世からはとても好まれた料紙の形式である。色紙形や懐紙、半切など和歌や発句を浄書するのに、五・七・五・七・七を二行の分かち書きする形式の短冊は簡便でコンパクトな料紙であり、韻文の形式にふさわしく仮

名の連綿体に映える形式としてよく使われた。

しかし、アジアにおける共通言語の漢文を用いて作る漢詩のやりとりは、互いの共通できる認識と文化的異相に気付く交流の最たるものであろうが、短冊という書式・形式は日本だけのものであり、書家にいわせると短冊に漢詩は非常に書きにくく映りが悪いという。

おそらく、礼聘に訪れて初めて短冊を目にする者もいたであろう。和歌に作られた料紙だが、本来は懐紙を和歌浄書のために歌会などのために切ったものとも言う、それ以前から短冊という名称は平安時代からあるが、和歌題などを書くためのメモ用紙や付箋紙扱いのものであった。大量に持ち込んだ朝鮮紙もほしがる日本人の求めに任せるうちに、多くの求めに応じることが出来る短冊は通信使の人々も染筆に用いているが、訳官の俳諧発句が認められた朝鮮紙の短冊はささやかな一葉であるが異文化交流の記念碑的なものといえよう。同様な発句短冊・和歌短冊は諸所に残ることであろう、その一点一点の伝存と伝存の由来経歴を吟味調査することによってさらなる研究のテーマは広がっていくものといえよう。

(参考文献)

- ・ 辛基秀『朝鮮通信使往来 260年の友好と平和』労働経済社、1993年11月5日刊
- ・ 映像文化協会編『江戸時代の朝鮮通信使』毎日新聞社、昭和54年12月25日刊
- ・ 管宗次「朝鮮通信使一日本に残る韻文資料とその享受一」(「人間文化の諸相と東アジア—異文化とは何か—」関西文化研究叢書4、武庫川女子大学関西文化研究センター、2006年9月16日刊)
- ・ 管宗次「朝鮮通信使文芸資料(新出をめぐって)」(「日本文化学報」第15輯、韓国日本文化学会、2002年11月刊)
- ・ 三宅英利『近世アジアの日本と朝鮮半島』朝日新聞社、1993年12月刊

(武庫川女子大学文学部日本文学科教授 管宗次 すが・しゅうじ)